

み入れ、燃料は主に石炭をたいだ。今日では各自宅での入浴であるが、当時月を仰ぎ虫の鳴く声を聞いた野外風呂の情緒と景観はなつかしいものである。

この河川にちなんで川神祭りの行事がある。毎年五月に立野と中島地区の境界の場所、昔の「ひゃあらんさん」この広場に菟うさぎを敷き、弁当やご馳走を持ち寄ってお祭りする。その趣旨は川の水に対する感謝と水難予防である。この堀水に関連して毎年二月には「寒の水」の習俗がある。これは正月に搗いた餅を寒の水につけておくと一年中腐らないというのである。寒の水を大瓶の中に蓄えこれにつけた餅は、昔から馬耕やごみ揚げや子供たちのおやつとしての「黄粉餅—きなこ餅—」となる。この味はまた農村では欠くことのできない風味と栄養満点の食品でもある。

この立野には毎年の正月行事として、「百手」があるが詳しくは民族編に記載している。

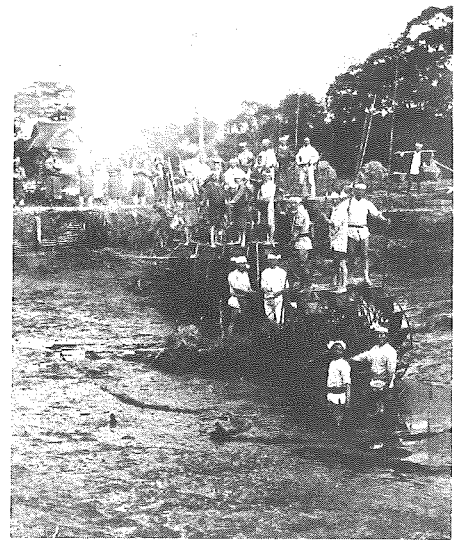
二 実 久

実久は本町の東北部に位置し、北は堀を隔てて佐賀市本庄町と境し、東は立野、西は鍛冶屋、南は上町に相接している。正保絵図に「実久」の村名が見えるが、有明海の干潟が干拓へ移行していった鎌倉時代の海岸地帯とみられている。万延元年の郷村帳には実久村の小字に「鍛冶屋・上町・島の内」が見える。

現在の戸数は四十三戸で昔は農家が大部分を占めたが、今日では農業九、サービス業八、建設業六、製造業五、その他無職や運輸通信、公務員等各種各様の産業に励んでいる。

実久の地名について地元の人々の伝承によれば「実久の郷」——よりきており、その郷主は故山口元助である。この山口元助は当時石高切米五石五斗の鉄砲足軽で、その大組頭は鍋島主水であった。その頃この村落の東の隅に「郷倉」があつて、藩政時代から粃もみを貯蔵していた。一面「実久津」——の名称も残っていて、昔は海岸線か河川に近く、粃や穀類を船で積み出す場所だったことも考えられる。現に「喜十屋敷」の名も残っているが、これは故平方喜十の屋敷のあとで、その頃、領中で十五石の組頭であつたという。今回の水田圃場整備事業の際、この喜十屋敷の跡から数個の遺体や位はい等も掘り出されたそうである。その他、なまず屋敷とか田中屋敷等の旧地名が残っており、田中屋敷には墓地が現存している。

この実久は他の村落に比べて土地としては狭い方であるが、龍水院と円通寺の二カ寺があり、すでに廃寺となつた威徳寺と潮音寺があり、四つの寺院が連立していた。このことは実久が東与賀村発祥の地として人口も多く戸数も多かったのではないかと推定される。実は本庄町鹿の子八幡宮から御神体の一つを分けて、東与賀町船津八幡宮へ移した時の絵巻物が、この集落の旧家村岡道栄宅に保存されている。それらと考え合わせるとこの実久は立野や鍛冶屋と共に、東与賀町でも一番早く開拓された土地ではないかと思惟される。ところが鍛冶屋にお



昭和初めの堀干し

ける鍛冶職の衰退と共に、戸数も減じたがその際に実久より鍛冶屋に移住者が多かった。現在鍛冶屋に住む井原・平方・御厨等の姓はその代表であって、元々は実久の子孫であり分家である。

実久の南部に面して広大な境内を擁して、霊峰山龍水院の古刹がある。

創立は寛永五年であるから、今から三百五十年も前のことである。この龍水院の東方に墓地のみが残っている大応山威徳寺がある。この「威徳寺」―に関して、佐賀市本庄町御厨一八（現在年齢七十五歳）の談話を、本誌「仏閣」―龍水院の部に精細に書いている。龍水院の広い境内や長い門前の参道には、種々の地蔵尊や石塔が立ち並んでいる。夜泣き地蔵は幼児や赤子の夜泣きを封じてくれる地蔵さんである。人が寝静まっている真夜中、人に悟られぬように、赤色の胸掛けを作つてそつと掛けてやると、あら不思議やないかなる泣き虫小僧もびたりと泣き止む―というありがたい地蔵尊である。

庚申塔はもと龍水院の畑地にあつたが、今次の圃場整備にあつて現在地に移転した。この塔は約三百年の歴史を持ち、昔から実久地区の守護神として住民の尊敬を受けた石塔である。また一本立地蔵は、実久の副島定男が所有する水田にあつたが、「三界萬靈村中」の題字が残つており、現在地に移転して祀つたものである。惜しいかな年代は不明。

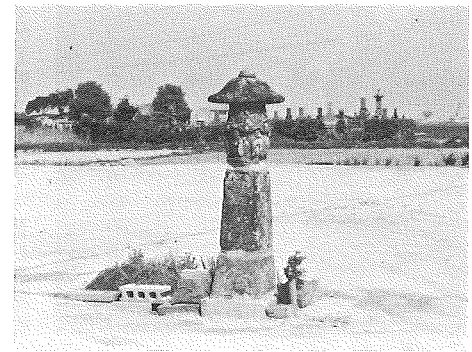
福聚山円通寺は実久村の西北部に在つて、本寺は佐賀市本庄町の高伝寺である。この寺院の境内に四国の金毘

羅宮を併祀している。これは神仏混交時代の遺跡と思われるが、このことについて佐賀市本庄町観音寺住職三好大和尚の「金毘羅宮伝記」がある。これは別記の「仏閣」円通寺に記載している。この金毘羅権現の御分身を讃岐よりお受けして来た際に、共に貰い受けた「クロガネモチ」の幼木が成長して、現在御堂の直ぐ側に空高くそびえ立っている。この「モチ」の大樹は佐賀の名木に指定登録され、標札には「樹齢二百年余」と明記されている。この金毘羅宮は一度大火災にあつたが被害も少なく鎮座まして早くも二百余年を経過し、毎年十二月及び正月には実久村の氏神様として盛大なお祭りを挙行している。

実久と鍛冶屋の両村落は、その位置と地形から見てもその境界が判別できぬほどに隣接しており、縁故親族関係が多い。それだけに両村の親密度が濃厚で昔は区長（連絡員）も「実久・鍛冶屋」をまとめて一人が担当した時代もあつた。したがつて現在でも小・中学校の父兄会、PTAや大運動会等の行事でも同一地区として取り扱ひ、児童・生徒達も仲よく集団登校や地区対抗継走等見事な成績をおさめている。

この事は児童・生徒のみならず両村落の成人や青年層、母親達も実久公民館を中心に、年中行事を打ち合わせ実行して各家庭の安泰と共に村落の繁栄に努力して来た。戦前の時代から左記のような成人の信仰行事や学童の安全祈願が実践されていた。

まず綾部さん詣りであるが、毎年八月十六日頃を中心に三養基郡の綾部神社へ台風よけの神だのみである。昔から主として農家の若衆がこれに参加したが、現在では生産組合の人々が日帰りで参拝している。戦前や戦中は、この村落から出た出征兵士の武運長久を祈つて、佐賀市金立町の金立権現や小城郡小城町の清水さん詣でを盛んに行つた。毎年土用の日には、川神祭りや川副町南里のひゃあらんさんへのお参りを欠かさず、水田や生活



一 本 地 蔵

用水に対する感謝と幼児の水難防止を祈念したのである。

三 鍛 冶 屋

鍛冶屋の北部は佐賀市本庄町鹿の子と境をし、東部を実久に西部は上古賀に近接している。現在の戸数は二八戸で東与賀町内では小村落に属している。昔は鍛冶職がこの村落の大部を占めていたが、現在農業六、建設業五、卸小売四、運輸通信三、その他等で、ここも各種各様の業態で生計を保っている。

鍛冶屋という地名は、その昔この地区は鍛冶職の人が多かったので、そのままざり「鍛冶屋」と命名されたものである。一番の最盛期の明治元年の頃は、この村落は四十戸余りもある大村落で住民のほとんどが鍛冶業を営んでいたらしい。その鍛冶といっても刀剣類や農器具ではなく、主として家の建築や船舶の製造に必要な和釘（当時は家釘とか舟釘とも言った）で、長さは八サツから十二、三サツの長い釘であった。その形も洋釘と違って、帽子のついた釘ではなくて、T字型の細長く、しかも長大な釘であった。

この釘造りには鍛冶屋さんは、ふいごを使って石炭がらやコークスの燃料で強力な火熱をおこし鉄の原料をこれて熱しては打ち、打っては熱して作ったのである。その鉄を打つカッチンカッチンの高い音律は昼夜を分かたずこの村内外に響き渡り、明治の終わり頃までこの家業にいそんでいたという。製品は主に佐賀市内や近くは筑後の大川や遠くは鹿島、塩田方面にも売却されたのである。ところがこの和釘に対して洋釘が製造され販売さ

れるに従って、この地区でも漸次に衰亡に傾いていった。こうして明治五年頃より住民は次第に他の町村へ移転し一軒も鍛冶職はいなくなりその後継者は跡を絶ってしまった。この和釘最後の職人は、故北村弥七で現在生きておれば百十七歳位という。

当時この鍛冶屋の畑地に、牛蒡ごぼうを広く栽培した。この地区で生産した牛蒡は他に比べて甘味があり柔らかくて大好評であった。これは鍛冶屋さんが捨てた鉄くずや石炭がらが土壌の成分を良くし牛蒡によい地味となったものと思われる。その当時「鍛冶屋のごぼう」といって評判がよく高く商品化され値段もよかつたとの記録がある。今日でも古老の井原保美は「あの鍛冶屋ごぼうの味は舌に残って忘れられない」としきりに賞讃する。

牛蒡の外にこの地区では、桑を栽培し桑の葉の産地でもあった。この地域一帯は昔、東与賀町内でも一段と高い台地になっていて「島の内」とも呼ばれていたという。このことは郷村帳―与賀下郷の中の「実久村」の中に、鍛冶屋・上町と「島の内」の名が出ている。この小高い島全体に桑の木が繁茂し、養蚕時にはその葉っぱが売却されて、相当の金額に上つたらしい。ところが本県の絹織物業が衰亡しこの養蚕がすたれた年代から鍛冶屋の桑畑も伐採され切り取られてしまった。同時に高値であった桑畑もその土壌や泥土は削りとられて、現在の佐賀市佐嘉神社前の南側駐車場の埋め立てに使われたり、近くは東与賀町内や近隣の家建築の際等の壁泥に売却されたりしたのである。

鍛 冶 屋

この村落の北部に鍛冶屋天神を祀る氏神さんと、近くに稲荷大明神があり、その御堂の後方には巨大な樟の大樹が亭々とそびえ立っている。樹齢も三百年近くはあると思われ、佐賀県の名木・古木の指定を受けた住吉神社